

英語学習、スタンバイ

－リメディアル教材の試作例－

福原 慶尚

目次

- I. はじめに
- II. 学習の原理
- III. 学生の心構え
- IV. 教師の役割
- V. テキストの活用

I. はじめに

最近、目を疑うような新聞記事を読んだ。それは、「『 $3X - X = 3$ 』と答えた学生がいた」「『奈良時代』も知らない」¹⁾とか、「『university』という英単語をつづれない新入生がいれば、『I can go』の過去形を『I can went』と書く学生もいる」²⁾など。

このような学生は、今や全体の一握りではないと見る向きもある。その背景には、18才人口の減少、大学入試の多様化、さらには高校までの「ゆとり教育」のツケが学生の低学力化傾向につながっていることなどが挙げられている。

この傾向を示す興味深いデータがある。「中1レベルの問題から高3相当レベルの問題をまんべんなく含ませた日本語のプレースメントテストで、中学生レベルの学生が、国立大学で5%、私立大学で19%、短大生で35%が含まれており、もはやリメディアル教育（やり直し教育）なしには大学の授業が成り立たなくなりつつある。」³⁾

本学ではこの種の教育を行っていないが、それに代わるものとして英語科は新入生用の橋渡し教材を用意している。この教材は『英語学習、スタンバイ』というタイトルの小冊子で、初回の授業（オリエンテーション）で使用される。

この小冊子は4つのジャンル（学習の原理・学生の心構え・教師の役割・テキストの活用）から成る。どのジャンルも学生の視点で書かれ、必要に応じて教師の手の内も赤裸々に明かされている。また、写真やイラスト、図表を多用して理解しやすいように工夫されている。以下、その内容を紹介しよう。

II. 学習の原理

「子どもは5才までに、その一生涯に学ぶすべてを学び終えるものである。」－Friedrich Frobel (1782－1852)

学生は、せんじつめれば「食べて、授業に出て、寝る」に尽きる。それだけのこと一、とりわけ「授業に出て」単位を取ることが学生には難しい。それは学生生活の中心である学習の励行がなおざりになっているからである。

では、「学習」とは何だろう。その答えとして、マン (N. L. Munn) の説明がわかりやすい。彼は学習を「一定の経験によって、以後の行動が多かれ少なかれ、永続的・進歩的に変わること」⁴⁾と述べている。

ここで、学習の前提となる「一定の経験」(たとえば、予習・授業・復習・試験・課外活動など)について、次のような事例で考えてみよう。

- (1) Aくんは、授業中よく居眠りをするが、成績は良い。
- (2) Bさんは、不正行為で試験に合格した。
- (3) Cくんは、苦手な英語を頑張り、レポートで「良」を取った。
- (4) Dさんは、夏休みに海外語学研修に参加し、英語に興味と自信をつけた。

このうち、(1)の「居眠り」と(2)の「不正行為」は学習の前提でないことは明らかで、学習したと言えるのは(3)と(4)。彼らはいずれも学習の場で求められる取り組みをし、そのことによって、「以後の行動」が「進歩的に変わる」ことが期待されるからである。

それでは「学習」は何のためにするのか。

- (5) He studies English to get credits.
- (6) He studies English to be a teacher.

(5)は「単位を取る」ための手段としての学習で、(6)は「教師になる」ための学習である。学習は社会で生きていくために必要な知恵と力を身につけるためのもので、単に単位を取るといった手段のために行われるものではない。諸君が既に通過した大学入試は高校教育の結果であって、手段ではなかったはずである。

さて、「学習」には2つの方法がある。1つは、柳の枝に飛びつくカエルの姿を連想させる試行錯誤型。つまり、「刺激」(柳の枝に飛びつこうとする行動)と「反応」(その行動によって、柳の枝に飛びつくこと)を合わせた練習中心のタイプで、「連合説」⁵⁾と呼ばれる。

もう1つは、思考過程で原理・原則を重視するタイプで、「認知説」⁶⁾と呼ばれる。いずれにせよ、これら2つのタイプを臨機応変に活用することが大切。そうすることで、学生それぞれが持つ創造性に富んだ潜在能力を表面化させ、ひいてはさらに豊かな大学生活の創造へつながる活動も可能になってくる。

学習は既に述べたように、生きる知恵と力を身につけるためのもので、人と競い合って勝ったり、人よりリッチになることではない。生きる知恵と力を養う過程では、人格形成ということも要求される。学生時代には、ときとして予想だにしない価値観がぶつかり合って、それまでになかった新しい発想が生まれるもの。それが人格形成に大きく反映してくる。

人格形成という点では、授業に差し支えない程度に、サークル活動やボランティア活動に参加する方がよい。そうすることで、自分の居場所が広がるし、それらの受け皿を通じて社会とのかかわりを持つことで自分を客観的に評価できるようになるからである。

Ⅲ. 学生の心構え

「青春の辞書には、失敗というような言葉はない。」—Edward George Earle Bulwer Lytton (1803—73)

1. 「知」の創造活動の主役

パーキンス (J. A. Perkins) という人がいる。彼は著書『変化過程の大学』(1966)で、大学の機能に触れ、「大学人の責任は、教育・研究・社会奉仕の3機能の完全な統合にある」と述べている。

この3機能中、「教育」の本質は「知」の創造活動にあることは言うまでもない。この活動は、ふつう、教室で学生と教師が向き合う授業形態をとる。大学の授業で、例えば原書を読む「英米文学」などでよくありがちな、もっぱら教師が講述し、学生はその聞き役に徹するというのでは「向き合う」授業とは言えない。

いみじくも、リバーズ (Rivers, 1975: 22—32) は、「外国語教育では、教師と学生の関係は ‘teacher-directed’

から ‘teacher-student interaction’ へ変わらなければならない」と述べている。双方向型の授業では、むしろ学生が主役になって、音読－読解－解釈の一連の活動を自発的に演じるべきである。時々散見されるが、何ら予習もせずに授業に出る、授業中はただ聞き放しでノートも取らない、授業が終わったその日に復習もやらない、こんな学生は授業の主役どころか脇役もおぼつかない。

2. 学生の基本姿勢

脇役、すなわち教師に依存する授業の受け方は学生の精神的自立を阻み、学習の本質をゆがめる要因になる。そこで、英語の授業で主役を演じる学生の基本姿勢は次のように要約できよう。

- (1) 単に作品のおもしろさだけでなく、原書を読むことの楽しさを知る。
- (2) 作者の人生(観)や作品の時代背景をつかむことにより、現代の普遍的価値観や自己の生き方を問い直す。
- (3) 学生・大学教育の本質を振り返り、独自の価値観を思索する。
- (4) 言語活動には学内外を問わず積極的に参加して、常に英語の運用能力を高める。
- (5) 国際理解・異文化理解の態度を養う。

ところで、「ノルマン人の征服以後、英語はラテン語を書き、フランス語を喋る権威者によってなおざりにされ、軽蔑された。したがって英語は規制もされず、意見を押しつけられることもなかった。当初から英語は自然に抗議と異議の言語であり、少数者の言語よりも多数者の言語であった。その資質は本質的に民主的であった。そして今でもそうである。英語は自由の声を表現してきたのである。」⁷⁾ この引用の中に「自由の声を表現」とある。ここに、学生が英語を学ぶゆえんがあるのである。

IV. 教師の役割

「脱皮しない蛇は滅びる。」－Friedrich Wilhelm Nietzsche (1844－1900)

学生が主役の「知」の創造活動では、とりもなおさず教師の力量が問われる。「教師の力量」とは、授業科目の豊富な知識を持ち、よく教材研究をし、外国語を流暢に使い、楽しく教え、さらに学生の質問に適切に答えられる力である。

ところが、「日本の大学の先生はティーチング・スキルの意識が希薄で、研究の意識が強くなっています。そのため、教え方はあまりうまくありません。」⁸⁾ と言われる。

また、次のような2つの前提⁹⁾に固執するステレオタイプの教師もいる。

- (1) あらゆる人間は基本的には同じ方法で学習する。
- (2) 人によって、習得の速い者と遅い者とがある。

これらの前提について、少し考えてみよう。

まず、(1)に関する最近の研究では「人間は頭の外観が異なると同様に、内部においても様相を異にしていることが明らかにされ、それに対応する教授法が議論され始めた。」¹⁰⁾のである。

また、(2)に関しては「学習の速度でなく、学習方法自体が学習者によって異なる。」¹¹⁾ことは周知の事実である。こうした視点から行われる具体的な授業実践例を紹介しよう。そこから学生は授業の主役となるヒントをつかむことができる。

事例1. テキストの英文和訳で、学生の答えが不完全か誤訳のケース

→よくありがちなこのケースでは、私たちは誤訳そのものを指摘するのではなく、むしろ学生の発表態度を評価

する。その上で、誤訳につながった背景（文脈・構文・語法など）を明らかにする。そうすることで学生はその後の学習法を改善することができる。学生の和訳にはいろいろなケースが予想されるので、私たちは予め正解の許容範囲を広げて対応しなければならない。たとえば、完全な「意訳」のほかに、「部分訳」・「直訳」・「要約（概略）」などはいずれも正解域に入るのである。（第5章「テキストの活用」4-8参照）

事例2. 言語活動でよく見られるように、理解力はあるが表現力を伴わないケース

→表現力（speaking）は4技能のうちで最も難しい。このケースでは、表現力の苦手な学生の人格的要素（自尊心・不安・自己防衛など）を考慮して、興味一意欲一積極的態度へと心理的プロセスのアプローチが考えられる。「興味」づけの段階では、非言語考察・視聴的メディアの活用のほか、ペアワークやグループワークなどの学習形態の工夫も教師の技量である。

事例3. 授業態度・課題提出ともに良好だが、試験（筆答）で点を取るこのできないケース

→学力より性格や適性を問われるこのケースでは、教師はHumanistic Approach¹²⁾の視点から、「今、この指導」（Here and now teaching : Galyan, 1977a）や面接法での対応を試みる必要がある。試験の数値だけでは本当の学力ははかれないからである。また、試験の結果を分析し、それを授業改善にフィードバックすることも指導技量の範ちゅうに入る。

最後に、「率直に言って、日本の大学は教育力において諸外国に大きく水をあけられています。その理由の一つは、教育する側にティーチング・スキルがほとんど問われていない状況にあることです。もう一つは、教わる立場にある学生が、その貧弱なティーチング・スキルについてほとんど疑問をもたないという状況があって、それが教育力をさらに衰弱させているのです。」¹³⁾ という指摘がある。私たちは「貧弱なティーチング・スキル」に陥らないよう常に最善の策を講じている。たとえば、次ページのような「授業評価アンケート」もその一つで、これは教師力を向上させる取り組み（FD：ファカルティ デベロップメント）の一環でもある。

授 業 評 価 ア ン ケ ー ト

授業科目コード <div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 20px; margin-top: 5px; position: relative;"> </div>	教員コード <div style="border: 1px solid black; width: 100%; height: 20px; margin-top: 5px; position: relative;"> </div>
---	---

A あなたの専攻 _____

B あなたの学年 1 1年 2 2年 3 3年 4 4年 5 その他

C あなたの性別 1 女 2 男

D あなた自身に対する評価

	90%以上	90-80%	80-70%	70-60%	60-50%	50%未満	
Q 1 授業への出席率	5	4	3	2	1	0	<input style="width: 30px; height: 20px;" type="checkbox"/>
	強く そう思う	そう 思う	どちらとも いえない	そうは 思わない	全くそうは 思わない	該当しない 又は分からない	
Q 2 私語をせず、受講態度は良い。	5	4	3	2	1	0	<input style="width: 30px; height: 20px;" type="checkbox"/>
Q 3 この科目に意欲的に取り組んでいる。	5	4	3	2	1	0	<input style="width: 30px; height: 20px;" type="checkbox"/>
Q 4 授業中に質問したいと思った。	5	4	3	2	1	0	<input style="width: 30px; height: 20px;" type="checkbox"/>
Q 5 授業に対して学習意欲がもてる。	5	4	3	2	1	0	<input style="width: 30px; height: 20px;" type="checkbox"/>

- | | 強く
そう思う | そう
思う | どちらとも
いえない | そうは
思わない | 全くそうは
思わない | 該当しない
又は分からない | |
|---|------------|----------|---------------|-------------|---------------|------------------|--|
| Q 6 この科目にはもともと興味があった。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |
| Q 7 授業の内容がよく理解できている。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |
| Q 8 私は、授業への出席状況、取り組みからみて、この科目の授業を正當に評価できると思う。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |

E 授業に対する評価

- | | | | | | | | |
|--|---|---|---|---|---|---|--|
| Q 9 授業は体系的だと思う。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |
| Q 10 よく準備されている授業だと思う。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |
| Q 11 授業で使われたテキスト、配布資料は有益だと思う。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |
| Q 12 黒板、OHP、ビデオなどの使い方が効果的だと思う。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |
| Q 13 理論や考え方、専門用語などがわかりやすく説明され、良く理解できる。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |
| Q 14 話し方が聞き取りやすい。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |
| Q 15 授業に刺激され、興味もてる。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |
| Q 16 教員の熱意が感じられる。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |
| Q 17 学生の質問に明快な回答を与えてくれる。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |
| Q 18 宿題、参考文献の提示、レポートなどによって、自発的な学習をうながす工夫がなされている。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |
| Q 19 教員との間に、授業を通してコミュニケーションがあると思う。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |
| Q 20 授業内容の組立て、時間配分は適切である。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |
| Q 21 この授業を他の学生に勧めたい。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |

- | | 易し
すぎる | やや
易しい | 適当である | やや
難しい | 難し
すぎる | 該当しない
又は分からない | |
|-------------|-----------|-----------|-------|-----------|-----------|------------------|--|
| Q 22 授業の難易度 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |

- | | 少な
すぎる | やや
少ない | 適当である | やや
多い | 多す
すぎる | 該当しない
又は分からない | |
|-------------|-----------|-----------|-------|----------|-----------|------------------|--|
| Q 23 授業内容の量 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |

- | | 強く
そう思う | そう
思う | どちらとも
いえない | そうは
思わない | 全くそうは
思わない | 該当しない
又は分からない | |
|---|------------|----------|---------------|-------------|---------------|------------------|--|
| Q 24 自分の専攻からみて、この科目は必要である。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |
| Q 25 この科目は基礎学力をつけるために必要である。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |
| Q 26 この科目は視野を広げる教養科目として必要である。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |
| Q 27 この科目は卒業後も役立つと思う。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |
| Q 28 成績評価では、勉強した人とならない人の差がはっきり出るようにしてほしい。 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 0 | |

	定期試験 のみ	レポート のみ	出席点 のみ	定期試験 と出席点	レポート と出席点	総合的	
Q 2 9 何に基づいて成績評価をしてほしいですか。	5	4	3	2	1	0	<input type="checkbox"/>
	非常に 良い	良 い	どちらとも いえない	悪 い	非常に 悪い	該当しない 又は分からない	
Q 3 0 この授業に対する総合評価	5	4	3	2	1	0	<input type="checkbox"/>
	強く 思う	そう 思う	どちらとも いえない	そうは 思わない	全くそうは 思わない	該当しない 又は分からない	
Q 3 1 このような授業評価を毎学期行った方が良い。	5	4	3	2	1	0	<input type="checkbox"/>

このアンケートは、大阪外国語大学が実施しているものを借用した。

V. テキストの活用

「青春の辞書には、失敗というような言葉はない。」—Edward George Earle Bulwer Lytton (1803–73)

授業で学生が主役を演じるためには、テキスト・英和辞書・ノートの効率的な活用が欠かせない。中でも「テキスト」は高校で使用したものと大きく異なるので、その扱いには留意しなければならない。大学には、学習指導要領や検定教科書はないからである。したがって、テキストは大学独自のもの—主として、原書—が使われる。

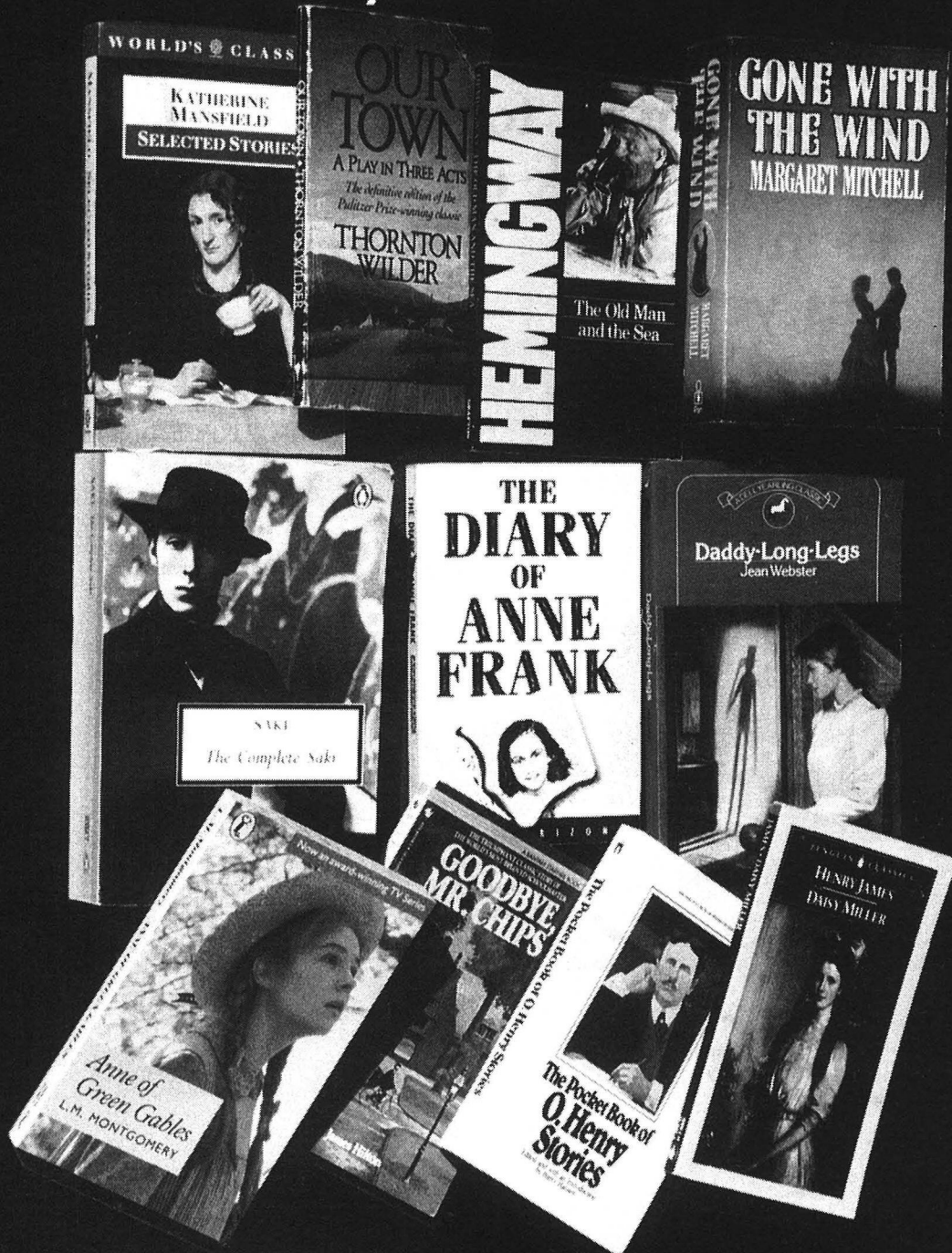
また、学生の中にはTOEICやTOEFLなどの検定試験を受けたり、海外語学研修に参加するものもいる。大学では英語を体験する幅とチャンスが多くなってくるのである。そうなると教材選びやその学習のしかたも複雑になり、要領を得にくい。

そこでこの章では、テキストの音読練習や読解・日本語訳の方法を中心に具体的に述べていくことにする。

本学英語科では、次ページに見られるようなテキスト群から毎年数篇の作品を選んでいる。テキストを選ぶ目安は2つ、

- ①学生にとって、誰のどんな作品がおもしろいか。
- ②教師は学生にどんな主題 (P. 108参照) の作品を読ませたいか、である。

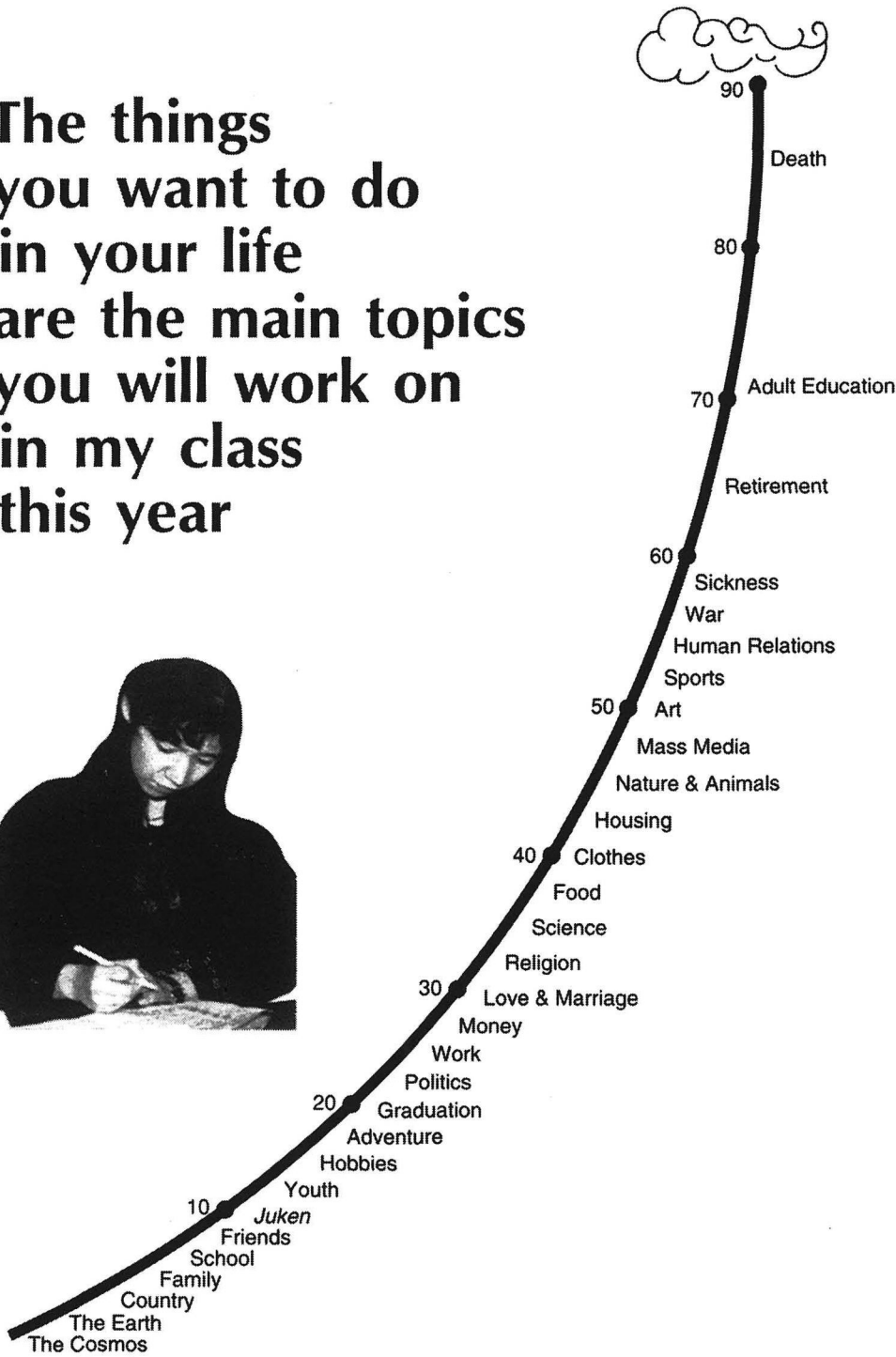

The Textbooks For this year are




In reading them,
You'll have much more pleasure
Than you had before



**The things
you want to do
in your life
are the main topics
you will work on
in my class
this year**



Percentage	Topic
0	The Earth The Cosmos
5	Country
10	Family School Friends Juken
15	Youth
20	Hobbies Adventure Graduation
25	Politics Work
30	Money Love & Marriage Religion
35	Science Food
40	Clothes Housing Nature & Animals
45	Mass Media Art
50	Sports Human Relations War
55	Sickness
60	Retirement
70	Adult Education
80	Death
90	Death



使用テキストが決まっても、それをいきなり読むのではない。まず、作品の概要を日本語で読む。「よく理解していない原書に取り組むよりも、よくわかっている日本語から入ったほうが理解が早くなり、かつ正確だから」¹⁴⁾である。

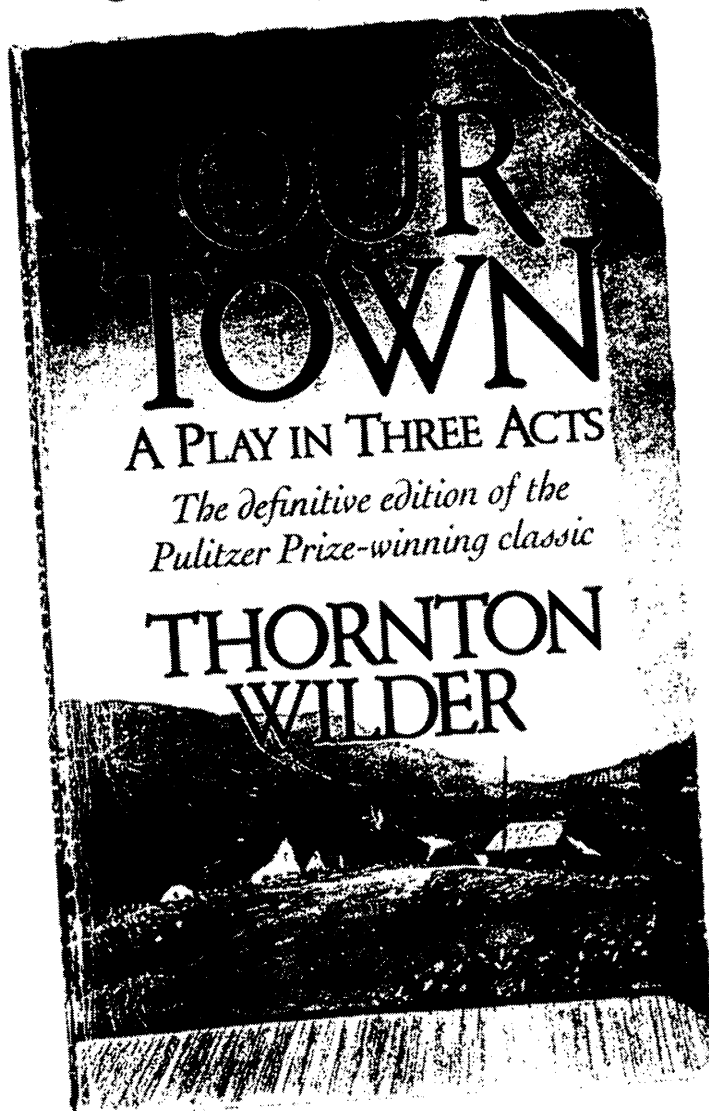
作品の概要は2つの教材にまとめてある。1つは「作品の要約」を紹介したもの（P. 109参照）、もう1つは「作者と研究課題」を紹介したもの（P. 110参照）である。

Our Town (1938) はNew Hampshire州の小さな町での市民生活を描いた(3幕劇)作品である。

第1幕では医者Gibbs氏一家と地方新聞の編集長Webb氏一家にスポットを当て、あわただしい起床、朝食、子どもたちの登校、夫人同志のおしゃべり、そして午後の情景——子どもたちの下校、親子の対話などDaily Lifeを描出する。

第2幕はGibbs氏の息子GeorgeとWebb氏の娘EmilyとのLoveとMarriageがテーマである。同級生のふたりはお互いに愛の亀裂や揺れを乗り越えて、愛情をはぐくみ、結婚へと進んでゆくが、結婚前夜・結婚式当日のEmilyの心理描写は見る者をして飽かせることがない。

第3幕ではDeathが語られる。この場面では死者と生者がともに登場し死者たちは地上に残された人たちと語り合い、人生・生命の永遠性について考えさせるのである。



OUR TOWN

— Thornton Wilder (1897—1975) —

Wisconsin州 Madison 生まれ。1906年から14年まで父が総領事を務めた香港で生活。帰国後、California でハイスクールを終え大学へ。18年、第一次世界大戦で学業を中断、沿岸砲兵隊に。翌19年、Yale 大学に入り、20年に B.A. を取得。後に Rome へ行き、American Academy で考古学を研究。21年に帰米し、Princeton 大学大学院でフランス文学を専攻する。

最初の作品は、第一次世界大戦中の Rome の貴族社会を諷した *The Cabala* (1926)。彼の名声を高めたのは、哲学的小説 *The Bridge of San Luis Rey* (1927)、Pulitzer Prize 受賞作品である。

Wilder が手がけた劇の代表作。作品の舞台は New Hampshire 州の片田舎。そこに、平凡な人たちの何の変哲もない日常生活を描いて、人間の生命の永遠性を示唆している。ほのぼのとした田園風景とそこで暮らす人々の単調な生活のスケッチは、今、私たちが忘れ、失いかけているものに気づかせてくれる。若い主人公 George と Emily が初めて人生の岐路に立たされて苦悩する場面は、同様の状況におかれる時の皆さんに何らかのヒントを与えるかも知れない。また、'Somep'n went wrong with the seperator.' や 'Her stummick ain't what it ought to be.' などの訛りにふれて、古き良き時代のアメリカに浸るのもこの作品の楽しみ方の一つ。

研究課題

- (1) 登場人物の心理や行動を読み取りながら、現代の普通的価値観や自己の生き方を問い直してみよう。
- (2) 本文中の 'There's something way down deep that's eternal about every human being.' における 'something' とはどのようなものか。

作品の概要を理解したら、今度は読み（reading）と理解（understanding）の作業を行う。Readingは音読練習から始める。この練習では、次表のように「アクセント」「イントネーション」「リズム」などに注意を払う必要がある。

4-1 日本語と英語のアクセントの違い

日本語	英語
Pitch Accent (声の高低)	Stress Accent (声の強弱)
例	desert [dézərt] (砂漠)
は [↑] し (橋)	desert [dizərt] (見捨てる)
は [↓] し (箸)	

4-2 日本語の意味と英語の

イントネーションの違い

私も英語を話します。	I speak English, [↑] top.
私は英語も話します。	I speak English, [↑] top.
私は英語を話しもします。	I speak English, [↑] top.

4-3 リズムの違い

I have to go.

* [ai hæv tu: gōu]

[ai hæf tu: gōu]

*: 非文マーク

声を出して読む音読練習の回数は多いほどよい。予習範囲の音読は少なくとも15回やる。それ以上読めば読むほど文意の予測が容易になってくるし、言語活動の向上にもつながる。

参考までに、読みの標準的な速さを上げておく。

4-4 日本人のリーディングスピード

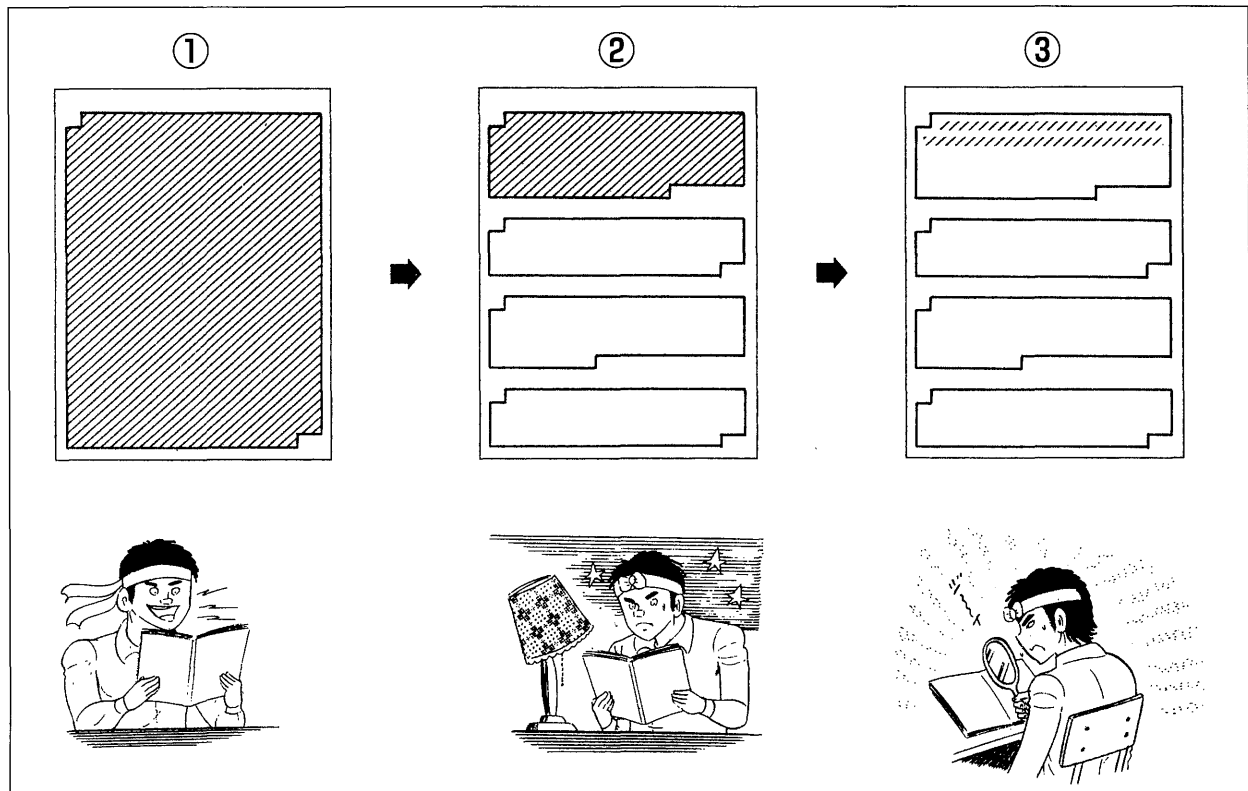
	目標	大学	高校	中学
音 読	130	120	100	80
黙 読	250	200	150	100

(W. P. M)

さて、音読練習の次は黙読により本文の要旨をまとめる。ノートを取り始めるのもこの時点である。要旨を把握する際、作品の背景的知识 (PP. 109-110参照) や文

法的知識が欠かせない。この作業をしっかりとやっておくと、それに続く読解がスムーズになる。ここまでの流れは次のように示すことができる。

4-5 本文音読・段階要約・読解の手順



読解、つまり原書の日本語訳は授業で最も難しい（辞書の活用はこの時点で始まる）。読解は常に完全な訳に仕上げる必要はなく、十人十色の訳し方でよい。その例をあげてみよう。

4-6 日本語訳の例

（例文） I don't like writing to my father for money except when I have to.

部分訳：私は好きではない／父に手紙を書くこと／お金のために／～の時を除いて／（ ）。

直訳：私は私が必要な時を除いて、お金のために父に手紙を書くのを好まない。

意識：どうしても必要な時以外は父に手紙を書きたくない。

要約：父に手紙を書くのはお金が必要なときだけ。

この例からわかるように、「部分訳」は英文のわかる部分を逐語的に訳し、わからないところは空欄になっている。この空欄を埋めるために、わからない部分の見当をつける。‘見当をつける’ということは、英文の流れ・段落の大意・辞書の意味などから推測することで、読解の基本である。

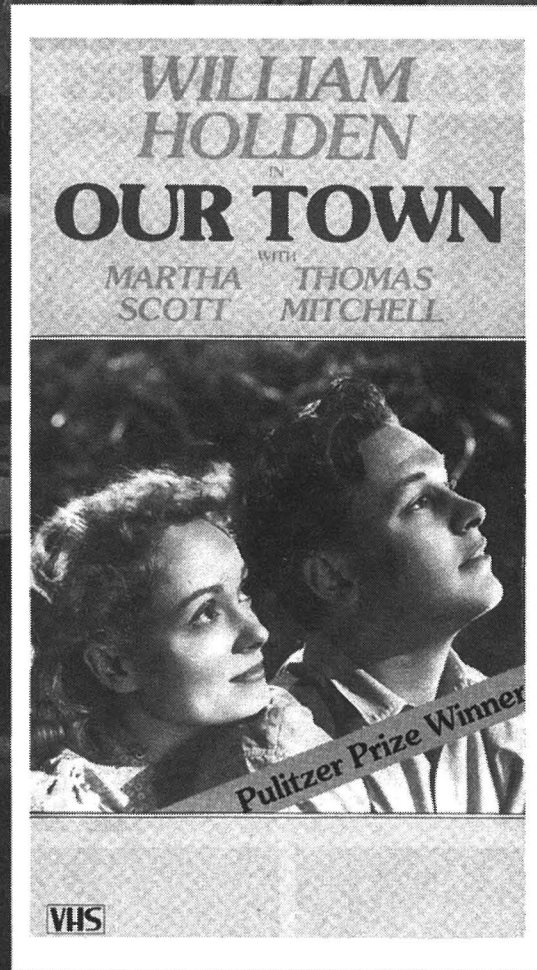
この基本技を用いて「直訳」を試みてみよう。直訳に妥協しない教師もいるが、英語の発想や表現法を知ることができるという点では直訳は避けて通れない。

直訳に見られる英語の発想や表現法を日本語の発想に置きかえてみるとことで「意識」が可能になる。意識ができると、英文の流れや段落の大意に沿って「要約」ができあがる。

要するに、部分訳であれ直訳であれ、まず予習範囲の英文の意味を大まかにとらえ、ストーリーの展開を予測しておく。訳せなかった英文の解き方や正解は授業で解決できる。

学生の積極的な読解活動が作品の内容理解を深めるだけでなく、読解力の向上につながりひいては授業の活性化に貢献することになるのである。

さて、授業のハイライトとも言える読解活動や言語活動が終わると、作品全体の理解を深めるためディスカッションやドラマ化などが行われる。次ページに紹介するようなビデオソフトも好評である。その他の活動例も挙げておく。



The little town of Grovers Corners — with all its problems, large and small — comes to life in Thornton Wilder's classic adaptation of his Pulitzer Prize-winning novel. Full of warmth and emotion, *Our Town* is about the spirit that's made America great and its people will live on in your heart and memory forever.

CAST

George GibbsWilliam Holden
Dr.GibbsThomas Mitchell
Emily Webb.....Martha Scott

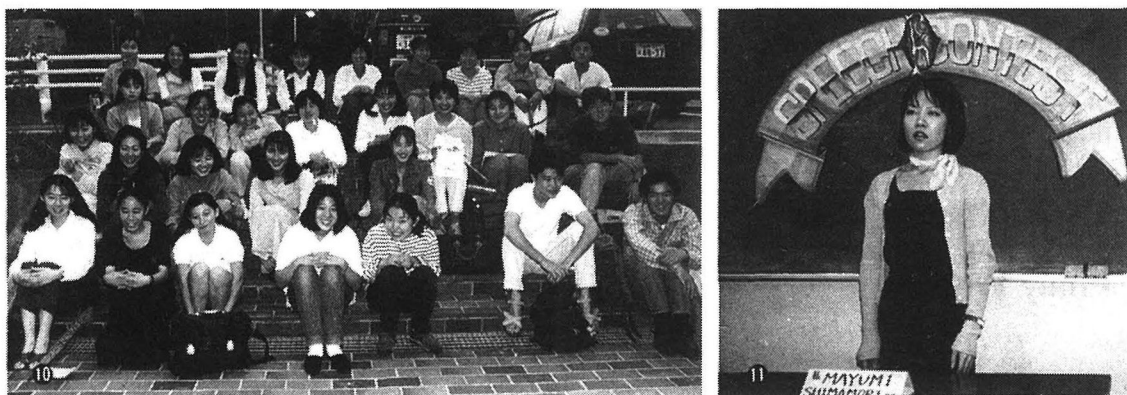
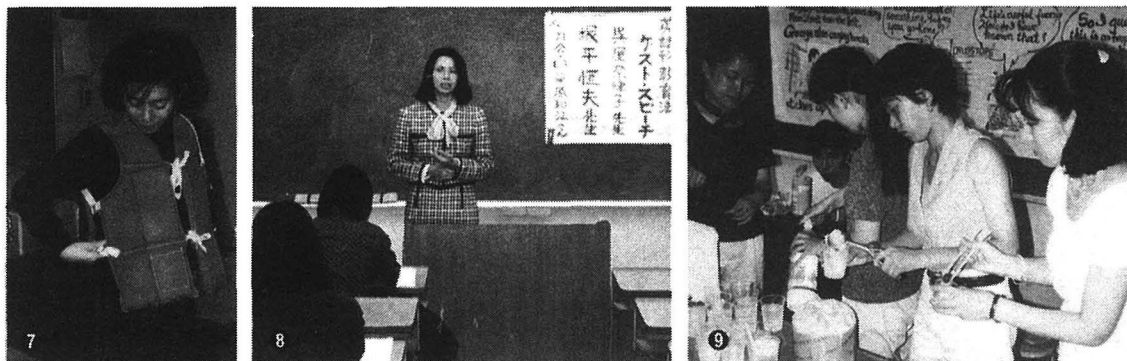
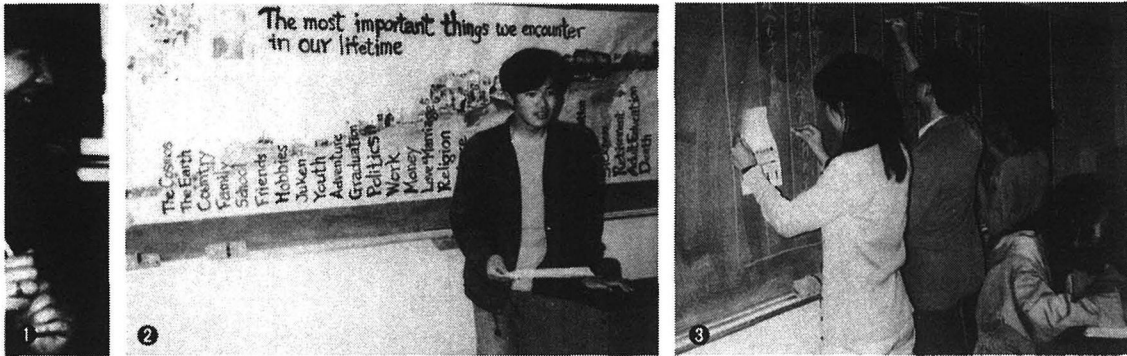
*Directed by Sam Wood
Produced by Sol Lessor*

88 minutes

Black and White



OUR CLASS WILL BE ENHANCED BY GUEST SPEAKERS, SIMULATIONS, ROLE-PLAY, VIDEOS, TEAM ACTIVITIES AND GROUP PROJECTS.



さて、学生によるプレゼンテーションが終わると、次ページのような形式の復習テストが行われる。1つの短篇作品を読み終えるごとに行われるこのテストは、前・後期に実施される定期試験とともに成績評価の対象になる。

SUMMARY EVALUATION

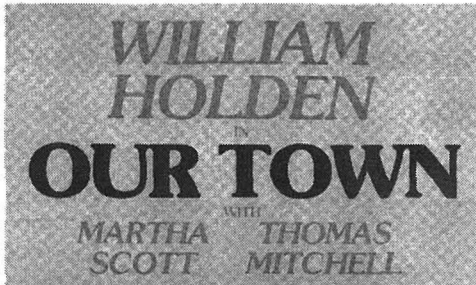
ENGLISH LITERATURE

	Act One	Act Two	Act Three
Rapid Reading			
	wpm	wpm	wpm
Vocabulary & Translation			
Oral Answering			

(should aim at 150 wpm)

$$\text{wpm} = \frac{\text{words you read}}{\text{time you required}} \times 60$$

**Textbook: Thornton Wilder's
OUR TOWN (1938)**



Student: _____ Major _____ Year _____

Instructor:
Yoshinao Fukuhara

Instructor:

Overall Comments by the

When you have finished reading one novel, you will get one stamp of the novel.



さて、この『英語学習、スタンバイ』の執筆はゴール直前まで来た。第2章の「学習の原理」から第5章の「テキストの活用」まで各章のポイントをかいつまんで述べてきたが、まだまだ書き足りない。しかし、大学英語のイントロ部分は一通り網羅したつもりである。

諸君がこの小冊子を読んで、その内容をある程度理解し、心の準備が出来たというのであれば、それは筆者の至福の喜びである。

ことわざに「ローマは一日にして成らず」という。私たちにとって英語はしょせん外国語、その英語は一朝一夕にして習得できるものではない。しかし、英語は今や世界の共通語。将来、どのような道を進むにせよ、この共通語を避けて通ることはできない。その道すがらこの小冊子が何らかの形で道しるべになれば幸いである。

諸君の向学心と充実した学生生活を期待しつつ本稿を閉じる。では、また授業で。

注

- 1) 読売新聞，2006年9月14日。
- 2) 同，2007年2月5日。
- 3) 小野博他，2005，『日本の大学生の基礎学力構造とリメディアル教育』メディア教育センター，pp. 1-4。
- 4) Munn, N. L., 1946, *Learning in Children*, Manual of Child Psychology, p. 370.
- 5) その中心的支持者は、E. L. Thorndike, E. R. Guthrie, C. L. Hullなど。
- 6) E. C. Tolman, 1932, *Purposive Behavior in Animal and Men*.
- 7) 岩崎春雄他（訳），1989，『英語物語』文芸春秋，p. 68。
- 8) 和田秀樹，2007，『頭のいい大学四年間の生き方』中経出版，p. 42。
- 9) 片山嘉雄他（編），1994，『新・英語教育の研究』大修館，p. 132。

- 10) 同, p. 133.
- 11) 同, pp. 133-4.
- 12) 人間中心のこの教授法は人間性心理学、理想主義、実存主義、人間性開発に対する関心、カウンセリング、心理療法などに立脚して、1970年代初めに提唱された。
- 13) 8) と同じ, p. 53.
- 14) 同, p. 94.